



背景

昔、徳島の津田の沖合いに浮かんでいた亀島かみぼつが陥没して海中に沈み、島から避難した人が徳島の福島ふくしまの築地に移り住んだと伝えられています。亀島が海中に没したのは、大地震のためであると言われていますが、その地震の時期については、正平16年（1361）6月18日に起こった正平の大地震、安政南海地震（1854）など諸説があります。かつて島があった所は、今ではお亀磯と呼ばれて、暗礁の上に灯台が建てられています。

アクセス 沖洲港（亀磯灯台）

- JR徳島駅より東へ直線距離約5 km
- 徳島市東沖洲
- 緯度経度 北緯34度03分20秒，東経134度36分12秒



昔、徳島の津田から一里（約四キロメートル）ほど沖に亀島という小島が浮かんでいました。島にはたくさん漁師が住み、漁家が千軒あるということから、「お亀千軒」と呼ばれていました。島の中ほどに大きな洞穴があり、そこには神様をお祀りまつしていました。穴の前には銅で作った鹿が置かれていて、狛犬こまいぬのように神様の場所を守っていました。

この洞穴の近くに、信心深い爺さんと婆さんがいて、毎日お参りをしていました。ある晩のこと、夢枕に神様が立ちました。

「爺と婆よ、これからは、お参りする時には必ず鹿の面を見よ。もし鹿の面が赤くなるようなことがあれば、島が沈む前兆であるから、一刻も早く島を立ち退くように」

正直な爺さんと婆さんは、それ以来、毎日神様にお参りすることに鹿の面を見ていました。これを見て、一人の若者が夜中にそと鹿の面を紅殻べにがらで真っ赤に塗りました。夜が明けて、お参りに来た爺さんと婆さんは驚きました。

「島が沈む。はよう逃げないかん」と島中に知らせました。

その話を聞いて、急いで港を出る者もあり、その様子を見て面白がる者もいました。爺さんと婆さんは「もう島を出る者はいないか」と何度も呼びかけ、最後の舟に乗って島を離れていきました。しばらくすると、島が揺れ、高い波が島を被い、島は海の中に沈んでいきました。